

美作女大

○金山真知子

奈良女大家政

丹羽雅子

目的 接着布のせん断変形特性は、曲げ変形特性とともに衣服の成形性や形態保持性、人体へのフィット性、表地や裏地などとのなじみやすきなどに直接影響を及ぼす特性である。すでに曲げ変形特性については、表地と芯地の同特性から接着布の曲げ変形特性を予測する複合則を導いているが、本報ではせん断変形特性の複合則を、表地と芯地のせん断特性から誘導する方法を検討する。

方法 表地は、羊毛と、羊毛とポリエステル混紡率の異なるカシドス、サージ、トロピカルの計12種類、接着芯地は基布が編布構造、織布構造、不織布の10種類を用いる。ローラー接着プレス機によって、実際の縫製工程で使用されている標準接着条件で接着し、表地、芯地および接着布のせん断変形特性をKES-FB1せん断、引張り試験機¹⁾を用いて計測する。せん断剛性G、せん断ヒステリシス2HG、2HG5の各特性値について、表地と芯地それぞれの特性値の和に対する接着布の特性値の比を複合比とし、複合効果の分析を行なう。

結果 せん断剛性Gの複合比はほぼ1.0で、ひずみが一定で力が加算される複合則が成り立つが、基布が編布の場合やや1より大きな値(1.3~1.4)をとる。またヒステリシス幅2HGでは複合比は1.1~1.3、2HG5では1.3~1.7で、いずれも基布が編布、不織布でその値が大きいのに対し、織布では比較的小さく、表地の動きになじみやすい傾向がみられ、複合比が基布の構造に支配されることが推察される。

1) 川端; 織機誌, 26, P721 (1973)